

「四天王寺と夕陽丘周辺を歩く」

担当：井守徳弘

●予定コース

近鉄鶴橋駅—産湯稻荷神社—東高津宮—井原西鶴の墓—近松門左衛門の墓—高津宮—真言坂—生玉魂神社—源聖寺坂—青蓮寺内竹田出雲の墓—吉祥寺—鳳林禅寺内上島鬼貫の墓—織田作之助文学碑—口縄坂—浄春寺内麻田剛立の墓—藤原家隆の歌碑—愛染堂(勝鬘院)—大江神社—四天王寺芭蕉の墓—四天王寺元三大師堂前の安政南海地震津波の犠牲者供養碑—六時礼讃堂—石舞台—亀井堂—宝物殿—中心伽藍—西門石鳥居—JR天王寺駅(解散) (約7km)

●産湯稻荷神社

祭神は宇賀魂(うかのみたま)命、下照比賣命、大小橋(おほおばせ)命で、三柱を総称して産湯稻荷大神といます。

宇賀魂命は須佐之男命と神大市比賣との間に生まれた子で、「うか」は「食(うけ)」と同じ食物の意味で、稲・穀物の神です。伊勢外宮の豊受大神と同一神です。「稻荷」は「いねなり」「いねになる」の稲によって霊徳を象徴した古語とされています。

下照比賣命は大国主と多紀理毘賣命の間に生まれた子です。紀貫之の『古今和歌集』仮名序のなかにも「歌というのは、天地が開け、始まった時からできたのです。とはいうものの、世に伝わるのは、天においては下照姫に始まります」とあり、和歌の祖神と伝えられています。

大小橋命は天兒屋根の13世の後胤で、第13代成務天皇の御代(4世紀半ば頃)、ここ味原郷に誕生した。その時、境内の玉の井の水を汲んで産湯に用いたので、この地を「産湯」といい、大坂六清水の一つで古くから知られていました。父は神功皇后の近臣中臣雷大臣(いかつおみ)、母は武内宿禰の娘、紀氏清夫という。大化の改新で活躍した藤原家の祖、中臣鎌足(614~669)の先祖に当る人である。

「産湯玉ノ井」を詠んだ歌に、

千早振 神代のままに 濁りなき 高津のしみづ くむも涼しき

(平安末期・鎌倉初期の歌人 小侍従)

天地の ひらけし代より 神さびて 遥かになりぬ 高彦の崎

(鎌倉幕府第3代征夷大將軍源 実朝 鎌倉右大臣)

などの歌があります。

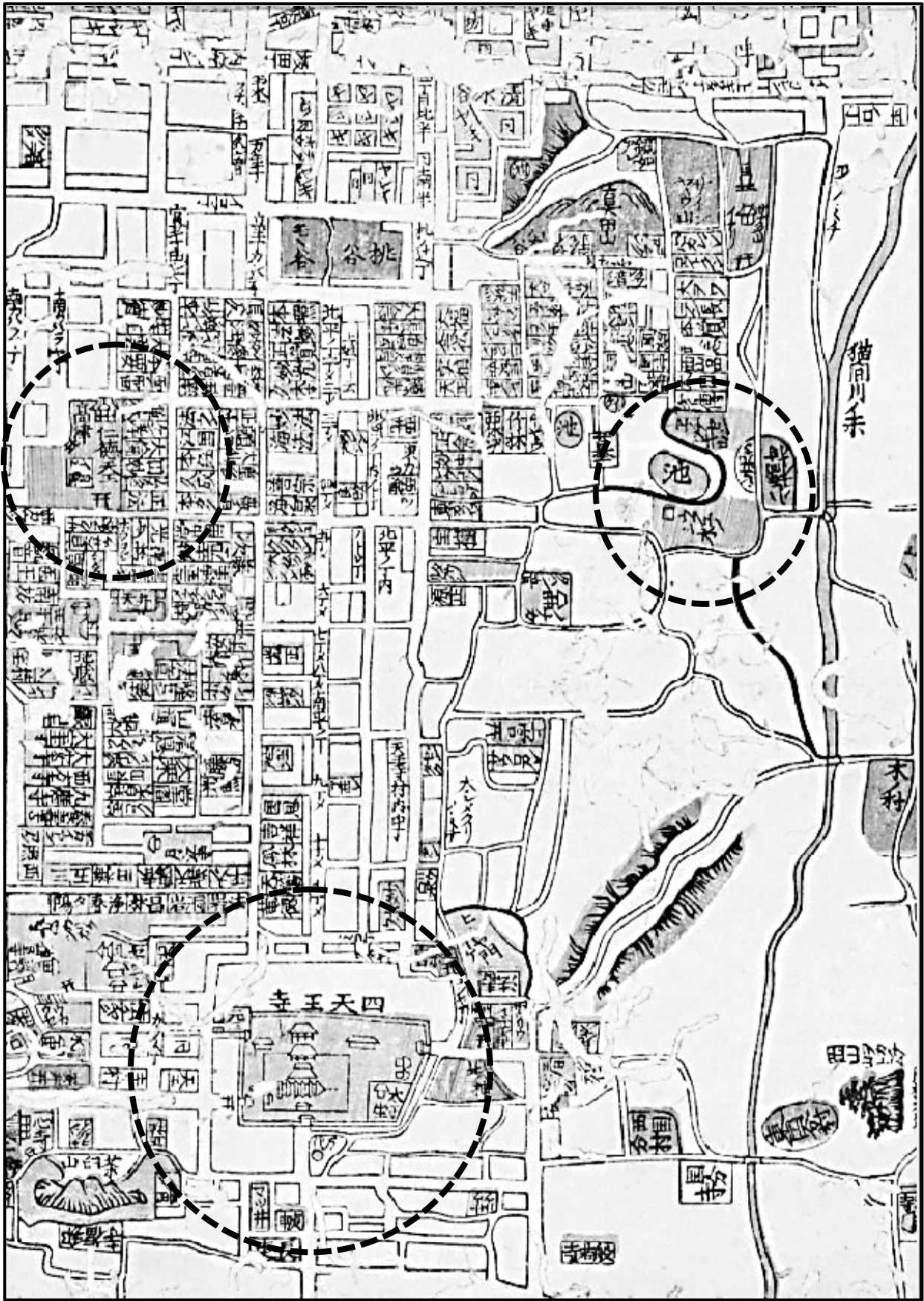
江戸時代末期から明治時代にかけての大坂の浮世絵師の森芳雪（もりよしゆき）による『浪花百景』に「産湯味原池」があります。産湯稲荷神社に隣接してあった味原池は、比売許曾神社の祭神下照比売が「天の磐船に乗って天下った旧跡といわれていましたが大正8年（1919）に埋め立てられてしまいました。江戸時代、付近一帯は桃の名所として知られた。味原池の向こうに大坂城が描かれています。

「真田の抜け穴跡」は真田山の三光神社（JR玉造駅西側）が知られていますが、ここ産湯稲荷にも真田の抜け穴はありました。明治18年の洪水で抜け穴の中間部が陥没し、戦後地元の人が埋め尽くしたとのこと。『大阪府史蹟名勝天然記念物巻5』に記載されている。



大阪府立中之島図書館

森芳雪の筆になる
『浪花百景』の
「産湯味原池」



『嘉永改正分見大坂図(部分)』 嘉永 7 年(1854)8 月

●国見の宮・元高津 東高津宮

祭神は仁徳天皇(主神)、磐之姫命(相殿)です。当社の由緒によると、往古より仁徳天皇社と号し平野社とも称した。俗に元高津と呼ばれます。

明治維新後、東高津宮に社名を改め、明治5年(1872)村社に列せられ大正2年(1913)に神饌幣帛料(へいはくりょう)供進社に指定された。元は近鉄上本町駅(当時は大軌鉄道)のホームに鎮座していたが、鉄道敷設に際し、昭和7年(1932)に現在地に遷座された。本殿以下の諸建物は太平洋戦争以後復興されたものです。

当社は、仁徳天皇の皇居であるとする明治31年(1898)の大阪府の調査報告がある。(『大阪春秋』第二十五号 堀内宏昭編 大阪春秋社 昭和55年 p.87)

「国見の宮」とあるのは、『日本書紀』仁徳天皇4年春2月6日群臣に詔をして「高殿に登って遙かにながめると、人家の煙があたりに見られない。これは人民たちが貧しくて、炊(かし)ぐ人がないのだろう」と百姓の窮乏を思い、3月21日、詔して「今から三年間すべて課税をやめ、人民の苦しみをやわらげよう」といわれた。3年後の7年夏4月1日、天皇が高殿に登って一望されると、人家の煙は盛んに上がっていた。10年冬10月、はじめて課役を命ぜられて宮室を造られた。それで今に至るまで聖帝とあがめられた。

「元高津」というのは、高津宮は東高津宮から遷座したといわれています。

●誓願寺境内の井原西鶴の墓

井原西鶴は本名を平山藤五といい、寛永19年(1642)に大坂鑓屋町(大阪市中央区)で生まれた(後年名乗った井原は母方の姓)。近松・芭蕉と並んで元禄文化の花を咲かせた西鶴は、西山宗因(そういん)門下の俳諧師として知られ、延宝8年(1680)生玉社別当南坊で、1昼夜ぶっ通しで4千句を独吟、さらに貞享元年(1684)住吉大社で一昼夜に23,500句を詠む才能の持ち主であった。

この新記録樹立を機に西鶴の情熱は俳諧から、小説へと転向し、天和2年(1682)小説の第1作『好色一代男』が、大阪の版元により初めて出版されたが好評であり、江戸でもベストセラーとなった。つづいて『日本永代蔵』、『世間胸算用』など鋭い観察と奔放な筆致で新天地を開いた。52歳を迎えた元禄6年(1693)大坂鑓屋町の草庵で没した。

西鶴の墓は明治20年(1887)を前後する頃、誓願寺境内の無縁墓に押し込められていたのが発見された。発見者は諸説あり、幸田露伴であるとも、朝日新聞記者の木崎好尚(近世文学研究家・金石学者)であるともいわれている。

墓は大阪市の指定文化財となっている。

墓の横には、「鯛は花は 見ぬ里もあり 今日の月」の句碑があります。鯛を食べたり、花見もできない貧しい里もあるが、今日のこの中秋の名月は誰もが鑑賞できるという意味で、貧者への温かな気持ちが表されている句です。

○懷徳堂中井家・並河家の墓所

誓願寺境内には懷徳堂中井家・並河家の墓所でもある。大坂の豪商たちが出資し、三宅石庵を学主に迎えて大坂尼ヶ崎町（現在の大阪市中央区）に享保9年（1724）に創設された大阪の学問所「懷徳堂」を設立した。享保11年（1726年）、將軍徳川吉宗から公認されて官許学問所となり、学校敷地を拝領した。中井家はその設立に尽力し第二代学主となった中井贅庵（しゅうあん）以来、代々学主を務めてきた。

戦後、大阪大学に法文学部が設置されるときに、財団法人懷徳堂記念会と大阪大学との間で協定が結ばれ、資料等と職員や講義等も大阪大学へ移管しています。

○武田 麟太郎の碑

武田 麟太郎（1904～1946）は、日本の小説家。代表作に、「日本三文オペラ」「井原西鶴」「銀座八丁」「一の酉」などがある。

●近松門左衛門の墓（国の指定史跡）

近松門左衛門は承応2年（1653）の生まれで、本名は杉森信盛、幼名は次郎吉といい、越前・吉江藩（福井県鯖江市吉江町）士杉森市左衛門信義の次男として誕生する。元禄年間を中心として、貞享～享保と約40年間にわたり劇作家として活躍し、享保9年（1724）に72歳で没した。

近松は、竹本義太夫や2代目義太夫のために100作を超える浄瑠璃を著す一方で、坂田藤十郎のために20数作の歌舞伎狂言を著しています。

『曾根崎心中』、『心中天網島』、『女殺油地獄』などの世話物に代表される作品に描かれる人間の姿は今日に通ずる所も多く、伝統芸能や演劇、映画など、たくさんの人に感動を与え続けている。

尚、近松門左衛門の墓は兵庫県尼崎市久々地の「広濟寺」にもあります。

近松門左衛門の墓は、当初近くの法妙寺境内にあったが、同寺は大東市へ移転し、墓だけは現在地におかれ、押し込まれたように残っています。昭和55年（1980）に整備が図られ、国の指定史跡となっている。

墓碑銘

（正面） 阿耨院（あのかいん） 穆矣（もくい） 日一（にちいち） 具足居士
（妻の戒名） 市珠院妙中日事信女

（裏面） 享保旧甲 辰年十一月廿一日

（台石） 近松氏施主 正七

○常夜燈

地藏坂の東端（谷町筋）には、安政元年（1854）に建立された常夜燈がある。

この年には、露使プチャーチンが長崎に来港や米国使節ペリーが浦賀に来航、吉田松陰が幕吏に捕われたりした騒然とした年でした。（ただし安政元年は11月27日に改元されており、嘉永7年の出来事です）

●地蔵坂

専修院に子育厄除・頬焼（ほおやけ）地蔵尊がある。この地蔵が地蔵坂の由来となりました。石碑には文政三庚辰年（1820）が彫り込まれています。

●高津宮

本座に第16代仁徳天皇、向かって右の左座に第14代仲哀天皇、第15代応神天皇、神功皇后、向かって左の右座に葦姫皇后、第17代履中天皇
葦姫皇后は八田皇女か、磐之媛ではなさそうな名前です。

履中天皇の皇后は草香幡梭（はたひめ）皇女である。履中天皇の皇妃に黒媛がおり、（葛城葦田宿禰の女）がいる、この人なのでしょうか。いずれにしろ葦姫皇后ではなく不明です。

社伝では平安期の初期清和天皇の貞観八年（866）勅命によって旧都の遺跡を探索して社地を定め社殿を築いてお祭りしたのを創始としています。

仁徳天皇の徳政を敬い大正十年に制定された大阪市歌にも「高津の宮の昔より、代々（よよ）の栄を重ねきて、民のかまどに立つ煙・・・」と歌われています。

高津神社に縁（ゆかり）のあるのは、

○【高津の富】 富くじ（現在の宝くじ）は寺や神社の修理基金を集めるのが目的で、江戸時代盛んに行われた。「高津の富」は高津神社が舞台となった落語で宿賃を踏み倒そうとした男がなげなしの一分の金で千両を当ててしまった話である。その他に「崇徳院」「高倉狐」の落語の舞台となっている。

○【高津の黒焼き屋】 西坂をおりたところに戦前まで大阪名物の黒焼き屋が二軒あった。惚れ薬「イモリの黒焼き」「願かけのへび」など奇妙な薬を売っていた。

○【遠眼鏡屋】 江戸時代は今の絵馬堂の当たりが、展望の名所として全国にも知られており、ここで望遠鏡を貸して大阪のまちなみの説明をする商いが庶民の娯楽としてにぎわっていた。

○【縁切坂】 西坂は俗に縁切坂と呼ばれていた。その昔、この坂は三曲り半に道が曲がっていて「摂陽奇観」巻六高津の条は「高津西ノ坂世俗去り状坂といふ三下り半に曲がりたる由也」とあり、これが縁切坂の名のゆえんである。

○【相合坂】 相合坂は、別名縁結びの坂と呼ばれ、男女それぞれ南側と北側から登り、ちょうど頂点のところで出会うと相性がよいといわれている。

○【梅乃橋】

高津宮が位置する上町台地は、古来より名水が湧くところとして知られていて、その湧き水の一つがこの川の水源だったようです。梅乃橋には明和5年（1768）に天満九丁目の長浜屋五兵衛により奉納されたことが橋柱に刻まれています。



大阪名物粟おこしについている梅鉢の紋は、たいていの人が天満宮の梅と考えていますが、実は高津宮の梅なのです。

●真言坂

天王寺七坂と呼ばれる坂の一つで、一番北に位置し、かつ唯一南北に通る。

坂の名の由来は、このあたりに生國魂神社の神宮寺だった法案寺をはじめとした真言宗の仏教寺院が十坊（「生玉十坊」と呼ばれた）あったことに由来する。これらの寺院は明治時代初頭の神仏分離により撤去され、現在は周辺はマンションやラブホテルが建ち並んでいる。真言坂の両脇もマンションである。

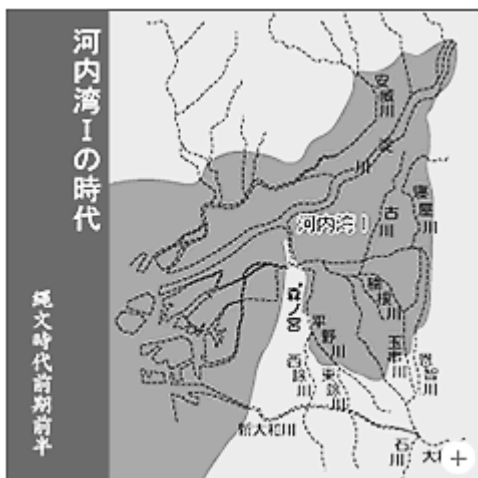
天王寺七坂は、上町台地西側（夕陽丘地区）にある 7 つの坂の総称です。坂のある地域一帯は「寺町」であり、豊臣秀吉が大坂城を築いた時に寺院を一箇所にとまとめた寺町であり、大坂の陣後、松平忠明が大坂城下の整理再編を行ない、大坂城下より移転させられた仏教寺院が多く集まっている。各寺院には著名人の墓や碑などがあります。坂の下が下寺町になるわけです。

○上町断層

この坂が「上町断層」にあたります。大阪府北部の豊中市から大阪市内の上町台地の西の端を通り、大阪府南部の岸和田市にまで続く。長さは約 40 km になる。断層の東側が西側に乗り上げることで、千里丘陵や上町台地を形作った。

最新活動時期は、約 28,000 年前～約 9,000 年前と思われ、平均活動間隔は 8,000 年程度と推測されているが、過去の活動履歴がよくわかっておらず、活動間隔も最後の活動時期も正確には絞り込めないため地震発生確率ははっきりとしたものではないが、警戒要の断層です。

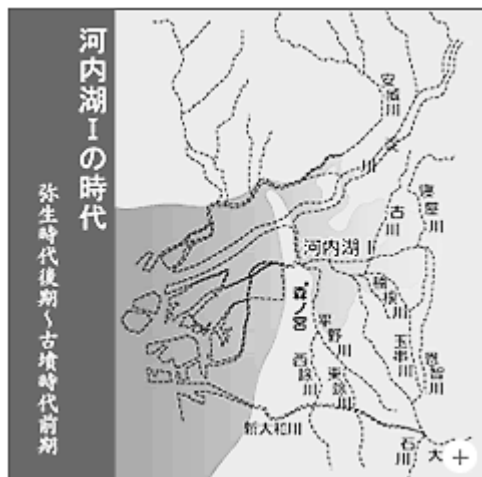
上町台地は断層の東側にあり、古くからの半島で地盤がしっかりしている。しかし、標高の低い周辺地域は近年の埋め立て地であり地震時の液状化などが懸念されており、標高の高い上町台地中心部は地震時の被害が少ないとされています。



約 7000～6000 年前

海水面が現在の水位より 1～2 m 高く上昇し、河内平野を覆った水面が、東は生駒山麓、南は八尾、北は高槻付近まで広がっていました。

偏西風の影響のもとに沿岸州が発達し、現在の松屋町筋付近には砂浜が続いていました。



約 1800~1600 年前

天満長柄の砂州が北へ延びきって、河内平野（河内潟）への海水の流入をさえぎり、河内潟は淡水湖となりました。



5 世紀以降

仁徳期の治水事業により、河内湖の水域が減少するとともに、流入している大和川枝川等が河口に三角州をつくります。そして湿地・草原あるいは堤防敷となり、その後、河内低地の陸地化が始まります。

●生国玉魂（いくくにたま）神社

祭神は生島（いくしま）大神・足島（たるしま）大神を主祭神とし、相殿に大物主大神を祀る。

社伝によれば、神武天皇が九州より難波津（後の石山碕＝現在の大坂城付近）にお着きになった際に、生島大神・足島大神をお祀りされたのが生国魂神社の創祀と伝わる。生島大神・足島大神は国土・大地の守護神であり、大地に生を受けるものすべてを守護される神としています。

生国魂神社は『日本書紀』第 36 代幸徳天皇(7 世紀中頃) 即位前記で、「仏法を尊び、神道を軽（あなづ）りたまう。生国魂社の樹を断（き）りたまう類（たぐい）これ也」と記され、乙巳の変(645 年の中大兄皇子・中臣鎌足により蘇我入鹿を暗殺)の後、645 年に孝徳天皇は難波（難波長柄豊崎宮）に遷都しており、この時に木の伐採をしたものと思われます。

中世では生国魂神社に隣接して石山本願寺が建てられ（大坂城辺り）、天正 11 年（1583）に豊臣秀吉が大坂城築城のため、生国魂神社に社領を寄進し社殿を造営し、天正 13 年（1585）現在地に遷されたと伝えられています。

明治維新の廃仏毀釈によって境内にあった神宮寺が境外へ分散するなど境内は著

しく変化したが、明治4年（1871）官幣大社に加列された。

本殿の脇には11社の境内社がある。

○皇大神宮—伊勢神宮(内宮)で天照大御神を祭神としています。

○住吉神社—底筒男（そこつつのお）命、中筒男（なかつつのお）命、表筒男（うわつつのお）命の住吉三神を祀る。

○天満宮—菅原道真を祭神とする。

○鳴野（しぎの）神社—大坂城外鳴野弁天島（JR京橋駅西南の現大阪ビジネスパーク辺り）は淀君の崇敬が厚く、後に「淀姫神社」として祀られるようになったが、明治10年（1877）現在地に移転された。

○城方向（きたむき）八幡宮—北方に大坂城があり、鬼門の守護神として北向きに置かれたため。

○家造祖（やづくりみおや）神社—家造りの祖神を祀り、建築業者から崇敬される。

○浄瑠璃神社—近松門左衛門や竹本義太夫など人形浄瑠璃（文楽）に成立に功のあった『浄瑠璃七功神』をはじめ文楽および女義太夫の物故者を祭神として祀られている。

浄瑠璃神社前に八雲琴の創始者中山琴主(ことぬし)の碑がある。

中山琴主は江戸後期・明治期の八雲琴(二弦琴)の創始者。出雲大社などに献奏する音楽に用いたので、当初は出雲琴（いずもごと）とも称し、後にその処女作『八雲曲（やくもふり）』にちなんで八雲琴と改称した。

○鞆（ふいご）神社—鉄鋼・金物の神として、また、かまどの神として信仰される。

○稻荷神社—日本三大稻荷の一つの祐徳稻荷神社（佐賀県鹿島市）の分霊を祀る。

○源九郎稻荷神社—日本三大稻荷の一つ。

○精鎮（せいちん）社—事代主神（恵比須）、比咩大神（弁天）が祭神。

○井原西鶴坐像

『好色一代女』、『世間胸算用』を著し、延宝8年（1680）、「生國魂神社南坊」で一昼夜四千句の独吟矢数俳諧で超人的な句会を興行しました。

○米澤彦八の碑

江戸時代中期の芸人で「豊笑堂」と号して大道芸人から身を起こし、生玉さんの境内にあった芝居小屋にて活躍した落語家の祖です。彼の芸は「当世仕方物真似」という物真似のような芸であったようです。

○松尾芭蕉の句碑

元禄7年（1694）9月9日（菊に長寿を祈る重陽の節句）に奈良から難波に入り、ここ生玉で

菊に出でて 奈良と難波は 宵月夜

の句を詠んだとされる。

○生田花朝の句碑

餅花の 柳芽をふく 二月かな

女性初の日展入賞者を果たした大阪風俗画の第一人者である。

●源聖寺坂

この坂は登り口に源聖寺があるので、その名を取っている。付近一帯は、寺町として長い歴史を持つ。松屋町筋まで坂になっています。坂の上あたりはラブホテル街としても有名なところ。生玉には江戸時代の頃には出逢茶屋というものがあり、船場の商家の手代が人目を忍んでこの坂を上り、出逢茶屋で逢瀬を重ねていたということらしいです。

齡延寺には、幕末に泊園書院を興して活躍した藤澤東咳・藤澤南岳父子の墓があり、銀山寺には、近松門左衛門の「心中宵庚申」にでてくるお千代、半兵衛の比翼塚が建てられている。

●齡延寺境内の藤澤東咳・藤澤南岳父子の墓

○藤澤 東咳

寛政6年(1795)生～元治元年(1865)没の儒学者です。寛政6年(1794)、四国高松藩(現高松市塩江町中村地区)に生まれる。中山城山に師事して荻生徂徠の古文辞学を修めるとともに、長崎に留学して中国語を学ぶ。文政8年(1825)、32歳の時、大阪淡路町御霊筋西(淡路町5丁目)に「泊園塾」(後の泊園書院)を開いた。

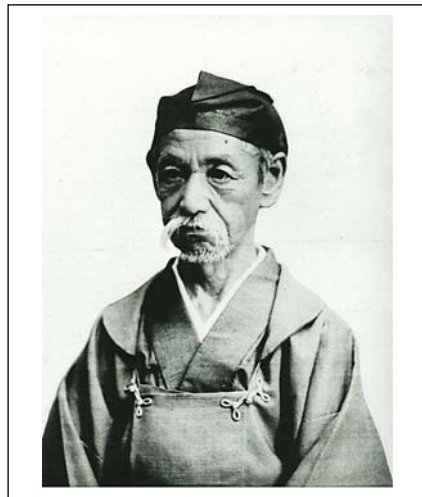


その後、東咳は大阪を代表する碩学として活躍し、高松藩から士分に列せられるとともに、豊岡藩主・京極高厚、尼崎藩主・松平頼胤の賓師(客分として遇すべき師のこと)として招かれ儒学を講じた。平野含翠堂(摂津国平野郷に享保二年(1717)土橋友直ら郷内好学の同志が創設した私塾)にも毎年出講した。幕末には勤皇の志士の慕うところとなり、泊園塾は大阪最大の私塾として栄えた。受講の門人は三千余名にのぼる。

○藤澤南岳

天保13年(1842)生～大正10年(1921)没で、讃岐の儒者藤澤東咳の長子。慶応元年(1865)、24歳で家督を継ぎ高松藩の儒官となる。慶応4年(1868)、藩論を佐幕

から勤皇へと劇的に転換させ、藩滅亡の危機を救う。その功により藩主から南岳の号を賜わった。その後、明治新政府からの出仕要請を断り、明治6年(1873)、32歳の時、泊園書院(漢学塾)を大阪船場に再興する。のち、淡路町1丁目に書院を移す。南岳は当代随一の学匠として名声高く、全国から学生が集まり、泊園書院の黄金期を作った。接した門人は五千人といわれ、交友の範囲も学界や教育界のみならず、政界や実業界に広がり、大阪を代表する文化人として活躍した。明治に活躍した高名な儒学者です。



●銀山寺境内の近松門左衛門の「心中宵庚申」でのお千代、半兵衛の比翼塚

近松門左衛門最晩年である70歳の作品で、享保6年(1721)4月に実際に起きた心中事件を題材にしたものです。大まかな内容・あらすじは、

武士の子として生まれた半兵衛は、大阪の八百屋の養子となる。養母は半兵衛の嫁・千代を忌み嫌い、半兵衛が留守の間に懐妊中の千代を実家に帰してしまう。千代を愛する半兵衛は、恨み言を口にする千代の父親に、「自分が離縁したのではない」と、申し開きに自害しようとする。しかし、自害すれば、「当て付けの自害」だとして養父母が世間から笑われる。自害を思いとどまった半兵衛は、「生まれ変わっても夫婦」と言っけて千代をなだめ、八百屋に連れ帰ろうとするが、養母への遠慮があって、親戚に預けることに。

半兵衛は、養母への義理、舅への義理、千代への義理に挟まれて、身動きがとれなくなり、とうとう庚申の夜、心中することを決意する。夜明けが近づくと、半兵衛は千代を刺し、自らは武士の生まれとしての誇りから切腹。夫婦折り重なるように死を迎えるのだった。武士の出であり 武士道を心得ている半兵衛が、義理のしがらみで生き場を失ってしまう、という悲劇である。

比翼塚とは、愛し合っけて死んだ男女を一緒に葬った塚。お千代は身ごもっていた。墓石にはその子のことを「離身童子」と刻まれている。

●増福寺境内の薄田（すすぎた）兼相（かねすけ）の墓

戦国時代の武将。通称は隼人正（はやとのしょう）。小早川隆景、豊臣秀頼に仕えた武将。

無類の酒好きと伝えられ、慶長19年（1614）の大坂冬の陣では、博労ヶ湊の砦（現大阪市西区立売堀6丁目あたり）に立てこもり、木津川を上る徳川の軍勢を散々に打ち破り名を挙げたが、大勝利に酔い側近を引き連れ新町の色里に入り浸っているすきに、博労ヶ湊の砦を奪われ『橙（だいたい）武者』と評されたが（橙武者のいわれは諸説あるようだが、橙は大きい割には中身はまずい。見掛け倒しであるというところから付けられたというのが一般的）、元和元年（1615）の夏の陣では東西両軍が相まみえた5月6日の道明寺の戦いで後藤又兵衛、塙団右衛門など共々奮戦し、討死した。

講談本「立川文庫」の仇討ちや狒々退治の伝説で知られる岩見重太郎のモデルと言われる。小早川隆景の剣術指南役・岩見重左衛門の二男として誕生しており、叔父の薄田七左衛門の養子となって全国へ武者修行に出たとされる。

●青蓮寺境内の竹田出雲の墓

竹田出雲は江戸時代の浄瑠璃作者。また三代に亘って竹本座の座元にもなっています。生年不詳～延享4年（1747）没。



竹本座は大坂道頓堀にあった人形浄瑠璃の芝居小屋です。また座元とは、その芝居小屋に関するすべてに責任をもつ経営者のような立場をいいます。

作者としての出雲は、近松門左衛門の指導によって作品を書き始めたようです。『菅原伝授手習鑑』は、出雲が中心となって書いたといわれています。

息子も人形浄瑠璃の作者であり竹本座の座元で、後に2代目竹田出雲を名乗りました。『仮名手本忠臣蔵』や『義経千本桜』などの作品に関わったといわれています。

●赤穂義士の寺 吉祥寺

寛永7年（1630）創建の曹洞宗の禅寺。

大阪における赤穂藩浅野家の菩提寺で、山門をくぐると大石内蔵助の石像が鎮座し、少し奥に入ると躍動感あふれる四十七義士の姿が見られる。

境内右手に赤穂浪士が討入後、切腹御免となった寺坂吉右衛門が四十六義士の冥福を祈る碑の建立を吉祥寺に依頼したといういわれのある四十七義士の墓がひっそりと佇む。討入りのあった12月14日にちなみ毎年「大阪義士祭」が行われている。

●鳳林禅寺境内の上島鬼貫（おにつら）の墓

松尾芭蕉と並ぶ俳人で「東の芭蕉、西の鬼貫」と言われた上島鬼貫は、伊丹出身です。

鬼貫は万治4年(1661)に伊丹の酒造家・上島宗次の三男として生まれました。

鬼貫の遠い祖先は武士の名家だったため、武士になりたいと熱望した鬼貫は、諸藩への短期間の武家奉公を繰り返します。しかし鬼貫は、「誠（まこと）のほかに俳諧なし」という言葉どおり、俳諧には真摯な態度を貫き、芭蕉と並ぶ評価を受けました。率直で平易な俳風を示した。著書に『犬居士』『仏兄七久留万（さとえななくるま）』『独りごと』などがある。

によっぼりと 秋の空なる 富士の山
月花を 我物顔の 枕かな
行水の すてところなし 虫の聲
春の水 ところどころに 見ゆるかな
冬は又 夏がましじやと 言ひにけり
そよりとも せいで秋立つ ことかいの
秋風の 吹きわたりけり 人の顔
おもしろさ 急には見へぬ すすきかな
つくづくと もののはじまる 火燧（こたつ）かな
花散りて 又しづかなり 園城寺
草麦や 雲雀があがる あれさがる
ささ栗の 柴に刈らるる 小春かな
心から 栗に味ある 節句かな
竹のこや 雪隠にまで 嗟峨の坊
鶯の 鳴けば何やら なつかしう

●口縄坂

縄に口がついているように見えることから、蛇には口縄という別名があります。天王寺七坂の一つが口縄坂という坂です。口縄坂という名前は、坂の下から眺めると坂道の起伏が蛇のように見えることに由来しているそうです。

天王寺区下寺町2丁目から夕陽丘町にかけて東西にのびている坂で、東側（夕陽丘町）の標高が高くなっており、途中は石畳の階段になっています。西側は松屋町筋、東側は谷町筋につながっています。

●織田作之助文学碑

織田作之助は、大正 2 年(1913)大阪市東区東平野町 (現天王寺区上汐)に生まれ、昭和 22 年(1947)死去した。

東平野第一尋常高等小学校(現生魂小学校)、高津中学校(現高津高等学校)を経て、第三高等学校(現京都大学)に進んだ。

三高時代、岸田国士(くにお)の戯曲に傾倒して、初めは劇作家を望んでいたが、その後、スタンダールに憑かれ、小説家に転じた。また、後年井原西鶴に傾倒した。

昭和 11 年、青山光二らと同人誌『海風』を創刊し、同 13 年、同誌に発表した「雨」が武田麟太郎に注目された。昭和 14 年、「俗臭」が芥川賞候補となり、最後まで賞をあらそった。また、昭和 15 年、「夫婦善哉」が改造社の第一回文芸推薦作品となり、『文芸』に再録され、文壇にデビューした。

戦後、「六白金星」「アド・バルーン」「世相」「競馬」などを発表し、一躍流行作家となり、肉体文学、デカダンス(虚無的、退廃的)文学の旗手として、坂口安吾、太宰治、石川淳らとともに、新戯作派、無頼派作家と称された。

昭和 21 年、「土曜夫人」を読売新聞に連載。小説の舞台がいよいよ東京に移ろうとするのに先立ち、取材をかねて上京するが、仕事に忙殺され、そのため大量の咯血をして、翌 22 年急逝した。

死の直前に書いた「可能性の文学」は、志賀直哉に代表される私小説への厳しい批判として話題になった。

「木の都」は、昭和 19 年『新潮』に発表された作品で、古き大阪への作者自身のノスタルジーが色濃くただよい、大阪的庶民気質や大阪人情への深い共感が読み取れるすぐれた小品だといわれている。

口紙坂は寒々と木が枯れて
白い風が走っていた
私は石段を降りて行きながら
もうこの坂を登り降りすること
も当分あるまいと思つた 青春
の回想の甘さは終り 新しい現
実が私に向き直つて来たように
思われた
風は木の梢にはげしく突っ掛
つていた
織田作之助 「木の都」より

●浄春寺境内の麻田剛立（ごうりゅう）の墓

麻田 剛立は享保 19 年（1734）生～寛政 11（1799）没の江戸時代の日本の天文学者である。

九州杵築藩の儒者綾部綱（けい）斎の四男として生まれ、医学を学びながら天文学、暦学を独学し、天明 6 年（1786）の日食の予報で官暦よりも的中して世に知られた。

明和 4 年（1767）杵築藩主の侍医となったが、勉学の時間惜しさに辞職を申し入れたが受け入れられず、安永元年（1772）に脱藩して大阪に出て、祖先の出身地の国東郡麻田村にちなんで、麻田を名乗った。その後、現在の大阪市東区本町で医業をしながら、更に天文観測などに没頭し研究を重ね、麻田流暦学を開いた。

ケプラーの第 3 法則を日本に伝わる前に独自に発見し、鹿毛（かげ）敏夫 著『月のえくぼを見た男』によると『五星距地之奇法』に記している。

功績は高橋至時（よしとき）、間重富、西村太沖（たちゅう）、山片蟠桃（やまがたばんとう）といった優秀な弟子を輩出したことである。

高橋至時の弟子には全国測量を完成させた伊能忠敬がいる。

映画になった沖方（うぶかた）丁（とう）の『天地明察』は渋川晴海であり、貞享元年（1684）独自の貞享暦を作った人物ですが、麻田剛立の改暦は 88 年後ということになる。



麻田剛立は日本人が見たこともなかった月のクレーターをも見いだしました。
左図は日本最古の月面観測図

●浄春寺境内の田能村竹田の墓

豊後国竹田村（現大分県竹田市）に生まれた田能村竹田（1777～1835）は幕末文人画壇を代表する文人画家の一人です。竹田は豊後から京都への旅を重ね、頼山陽や浦上玉堂ら多くの文人と交遊を持ち、繊細透明な書画の数々を生み出すとともに、平野五岳、高橋草坪（そうへい）、帆足杏雨（ほあしきょうう）、田能村直入、田近竹邨らすぐれた弟子たちを育てました。

顕彰碑の背面。顕彰碑は田能村竹田の経歴と共に大正 1 2 年（1923）に従五位が

贈られた事がしるされている。没後100年を記念して昭和9年（1934）に建てられた。



田能村竹田「暗香疎影図」

重文 大分市美術館所

「暗香疎影」とは、趣きある春の夕暮れの情景をいう。「暗香」は、どこからともなく漂ってくる花などのよい香りのことで主に梅の香りを指す。「疎影」は、光などに照らされて、まばらに映る影のこと。梅の別名でもある。よって、この語は主に梅についていうことが多い。

●宗教法人 一元の宮

創始者の元木勝一（本名：元木勇）は明治39年（1906）、北海道空知（そらち）郡の製材業の二男として生まれる。「宇宙一元の大元理」を釈いて宇宙一元之大神を崇拝する。信者数は1,077人。

「昭和47年（1972）6月18日午前8時に大地震起きるので、一刻も早く避難せよ」と云うチラシが名古屋や大阪で配られる。信者たちは自分の土地や家を売って山間部へと逃げる。その当日にマスコミは一元之宮に集まったが、結局地震は起きなかった。予言が外れた元木は教団施設内において白衣姿で切腹自殺。発見が早かったため助かった。昭和56年（1981）元木亡くなる。現在、中島教絵教主が後継している。

●夕日岡（夕陽丘）

かつては大阪湾に落ちる夕日を眺める絶好の地であり、大江神社、新清水寺、四天王寺西門辺りが有名だった。

幕末の国学者・伊達宗広は藤原家隆を敬愛しており、明治初期にこの地に「自在庵」を建てて居とし、この地を「夕日岡」と命名した。しかし明治5年に体調を崩して東京に移り住んだ。明治10年に宗広が死去した際、遺言により家隆塚の近くに埋葬された。のちに実子の陸奥宗光（第2次伊藤博文内閣の外相）ら一族9名もこの地

に埋葬された。(昭和 28 年に宗広や陸奥家一族は鎌倉・寿福寺境内に改葬)

●藤原家隆卿の塚 (歌碑)

新古今和歌集の選者の一人の従二位藤原家隆(1158～1237)卿の墓。、鎌倉時代初期の公卿、歌人。

藤原家隆には百人一首 98 番の

風そよぐ ならの小川の ゆふぐれは みそぎぞ夏の しるしなりける

があります。

安元元年(1175)叙爵、安元 3 年(1177)侍従。阿波介・越中守の地方官を併任し、建久 4 年(1193)正月に侍従を辞任、正五位下に昇叙。正治 3 年(1201)正月に従四位下。元久 3 年(1206)宮内卿。承久 3 年(1220)まで宮内卿を務め、辞任ののちに正三位に叙せられた。嘉禎元年(1235)従二位。嘉禎 2 年 12 月(1237)病を得て 79 歳で出家し、80 歳で没した。

藤原定家と並び称せられる鎌倉時代の歌人です。『新古今和歌集』選者のひとりで、新古今時代の代表的な歌人。新古今以後も、定家と共に、院歌壇および順徳天皇歌壇で指導的役割を果たした。後鳥羽上皇が鎌倉幕府に対して討幕の兵を挙げて敗れた承久の乱(1221)以降も、隠岐の後鳥羽上皇と誠実な交流を続けたという。家集に、藤原基家編の『壬二集』(『玉吟集』とも)があり、自歌合(自作の歌を左右に分け、一組みずつ合わせて優劣を自分または他人の判定によって決めるもの)に『家隆卿百番自歌合』が現存。

嘉禎 2 年(1236)この地に夕陽庵(せきようあん)を設け日想観(西に沈みゆく太陽に向かって念仏を称え、極楽往生を願う、観無量寿経に説かれている念仏修業の一つ)を修め

契りあれば 難波の里に 宿り来て 波の入り日を 拝みつるかな

の和歌を残し正座合掌してこの世を去ったと云われています。

五輪の墓碑が残され、夕陽丘の地名の由来となっています。

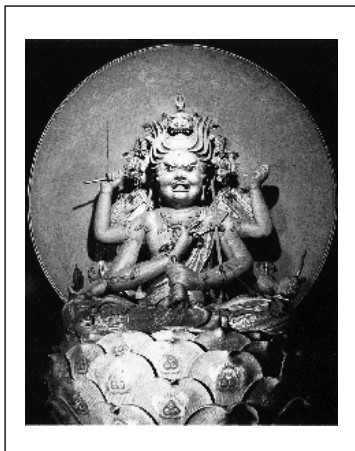
●荒陵山 愛染堂(勝鬘院) 四天王寺別院

『摂津名所図絵・勝鬘院・家隆塚』



○本尊 愛染明王坐像 (秘仏)

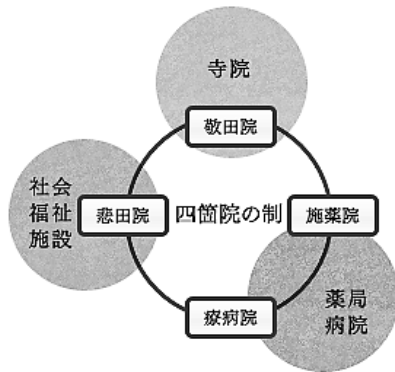
愛染明王は、もともとは煩惱〈愛欲や欲望、執着〉を悟りに変えて、菩提心（悟りの境地）にまで導いてくれる力を持つ仏様です。



推古天皇元年（593）、聖徳太子は、敬田院、施薬院、療病院、悲田院からなる四天王寺を建立されました。その中の施薬院は、あらゆる薬草を植え、病に応じて人々

に与えられるようにと現在の愛染堂の場所に建立されました。

当時の面積は現在より一層広大であり、また、建立の意味あいからいうと、我が国の社会福祉事業発祥の地とも言えます。



聖徳太子が四天王寺を建てられるにあたって、「四箇院の制」をとられたことが『四天王寺縁起』に示されています。四箇院とは、敬田院、**施薬院**、療病院、悲田院の4つのことで、敬田院は寺院そのものであり、施薬院と療病院は薬局・病院にあたり、悲田院は病者や身寄りのない老人などのための社会福祉施設にあたります。

施薬院が勝鬘院と呼ばれるようになったのは、このお寺で聖徳太子が勝鬘経のお経を人々に講ぜられ、そして勝鬘経に登場するお姫様・シュリーマーラー（勝鬘夫人）の仏像が本堂に祀られているため、後にこう呼ばれるようになりました。主な堂塔として、金堂（府の指定文化財）と多宝塔（重文）があります。



勝鬘夫人坐像

お寺の名前の元となった「勝鬘経」古代インドのコーサラ国・パセーナディー王の娘であるシュリーマーラー(勝鬘夫人)に対して釈迦が説法を行なったものということになっています。

○多宝塔（重文）

多宝塔は、推古天皇元年（593）聖徳太子によって創建されました。その後、織田信長の大坂石山寺攻めの際に焼失しましたが、慶長2年（1597）豊臣秀吉により再建されました。大阪市最古の木造建造物として国の重文に指定されています。

多宝塔の内部には、秀吉が戦勝祈願のために造像させたといわれる大日大勝金剛尊像と、極彩色で描かれた十二天の壁画と柱絵が奉安されています。

○愛染祭り

愛染祭りは天神祭、住吉祭に並ぶ大阪三大夏祭りの一つ。大阪の夏祭りは愛染さんで始まって住吉さんで終る」といわれることから、「あい (=愛) すみ (=住) ません」という言葉の語源となったという説もあるくらいです。

●大江神社

大江神社の境内の句碑。これは文化14年(1817)大坂の俳人松井三津人(みつんど)によって建てられた。

この句碑の書は森川竹窓(江戸後期、大坂で活躍した書家・画家)と山中松年(画家、碑面下部に秋草の絵)の筆になる。

芭蕉が『奥の細道』の旅の途中、北陸で詠んだ

あかあかと 日はつれなくとも 秋の風

の句が建てられている。

松井三津人は芭蕉の顕彰に尽くした大坂の俳人であるが生年は不詳。号は梅園。

父の千李が加藤暁台と親しく、蕉門にあったため、小さい頃から俳諧に親しみ、長じて八千坊駝岳(江戸時代中期～後期の大阪俳壇で活躍した俳人)に入門し指導を受けた。文政5年(1822)没。

●荒陵山 四天王寺

本尊は救世観音菩薩。

四天王寺は、推古天皇元年(593)に建立された日本仏法最初の官寺です。『日本書紀』は、物部守屋と蘇我馬子の合戦の折り、崇仏派の蘇我氏についての聖徳太子が形勢の不利を打開するために、自ら四天王像を彫り「もし、この戦いに勝たせていただければ、四天王を安置する寺院を建立しましょう」と誓願され、勝利の後その誓いを果たすために、建立されたとあります。

南から北へ向かって中門、五重塔、金堂、講堂を一直線に並べ、それを回廊が囲む形式である「四天王寺式伽藍配置」がとられており、日本では最も古い建築様式といわれています。

重なる戦火や災害に見舞われ、多くが焼失しましたが、現在の建物は創建当時(飛鳥時代)の様式を忠実に再現しており、古代の建築様式が今に残るのは貴重といえます。

総面積3万3千坪(約11万㎡)。甲子園球場の三倍の広さを有する境内には四天王寺式伽藍のほか、聖徳太子の御霊を崇る聖霊院(太子殿)があり、創建当時の品々など500点あまりの国宝・重要文化財を所蔵する宝物館もあります。



四天王寺元和再建伽藍図

○四天王寺元三大師堂前の安政南海地震津波の犠牲者供養碑

故政野敦子氏が河内郷土史研究会『あしたづ』に書いておられ、無縁墓の最上段に見つけることができました。碑文は他の墓石に隠れた部分もあり、全文は読めませんが、貴重な教訓「海鳴潮の干満みだれし時は早く津波の兆と知りて難をのかれ玉ふへし」と記されています。

『水都大阪を襲った津波－石碑は次の南海地震津波を警告している－』2012年改訂版 はじめに その3 長尾 武著で判読されているのを参考にすると、

(東面)「(梵字5字) 南無阿彌陀佛、諸国地震及洪波／水陸横死大菩薩」、

(南面)「(梵字5字)、去年霜月四月五日の地震を遁ん為に小船に乗居し輩(以下判読不能)／木津川口悉の大小数船一時に川上に押上り橋を落し(以下判読不能)／右前日より海鳴潮の干満乱しを志ら寿して死に至るもの愛憐れむへし」、

(西面)「(梵字5字) 海鳴潮の干満みだれし時は早く津波の兆と知りて難をのかれ玉ふへし」／古文書『記録帳』に「(地震、津波の惨状は) 筆紙に尽し難く恐敷事に候これ追善之為天王寺元三大師前に石塔建立之事」と記述されており現位置の近くに建立されたと考えられる

安政2(1855) 安政南海地震津波(1854年)の犠牲者供養石碑

安政南海地震は、江戸時代後期の嘉永7年11月5日(1854年12月24日)に発生した南海地震である。

約32時間前に発生した安政東海地震(東南海地震含む)と共に一連の東海・東南海・南海連動型地震として扱われ、安政地震、安政大地震とも総称される。この地震は嘉永年間末に起きたが、この天変地異や前年の黒船来航を期に改元されて安政と改められ、年表上では安政元年(1854)であることから安政を冠して呼ばれる。

当時は寅の大変（とらのたいへん）とも呼ばれた。

安政南海地震の2日後には豊予海峡でM7.4の豊予海峡地震が発生。また翌年には安政江戸地震(M6.9~7.4)が起きた。本地震や安政東海地震は安政江戸地震と合わせて「安政三大地震」とも呼ばれ、伊賀上野地震から1858年飛越地震（富山・岐阜県境）まで安政年間に連発した一連の大地震を安政の大地震とも呼ぶ。

江戸時代には南海トラフ沿いを震源とする巨大地震として、この他に慶長9年（1605）に起きた慶長地震、および宝永4年（1707）の宝永地震の記録がある。

○六時礼讃堂（重文）

境内中央に位置する雄大なお堂で、昼夜6回にわたって諸礼讃をするところから六時礼讃堂の名があります。薬師如来・四天王等をお祀りしており、回向（供養）、納骨等を行う当寺の中心道場でもあります。入口には賓頭盧尊者像やおもかる地蔵が祀られ、独特の信仰を集めています。修正会・聖霊会などの大法要はこのお堂にて行われます。元和9年（1623年）建立。椎寺薬師堂（境内北西、大江小学校付近にあった）を移建したものです。

○石舞台（重文）

亀の池の上に架かっている石橋に組まれた舞台で、毎年4月22日に聖徳太子を偲んで行われる聖霊会舞楽大法要の際には、古来よりの作法にのっとり舞台上で舞楽が舞われます。

側面に彫られた「舞台講」とはこの舞台再建に寄進の労をとった大阪の材木問屋の集まり（講）の名称です。

○亀井堂

亀井堂は太平洋戦争で焼失後、昭和30年に再建されました。亀井堂の霊水は金堂の地下より、湧きいずる白石玉出の水であり、回向（供養）を済ませた経木を流せば極楽往生が叶うといわれています。

東西桁行は四間あり、西側を亀井の間と読んでいます。東側は影向の間と呼ばれ、左右に馬頭観音と地蔵菩薩があります。中央には、その昔聖徳太子が井戸にお姿を映され、楊枝で自画像を描かれたという楊枝の御影が安置されています。

○宝物殿

聖徳太子により、日本仏法最初の大寺として593年に建立された四天王寺内に位置する。幾度かの災害によって建造物や宝物などが失われたが、昭和45年に再建。絵画、彫刻、考古、工芸などの収蔵品のほか、国宝の「扇面法華経冊子」、「四天王寺縁起」などの貴重な文化財約500点を保存・継承する。

春季名宝展（期間：平成25年3月16日～5月6日） 聖霊会や授戒に合わせ、舞

樂所用具・両界曼荼羅を中心に公開しています。

- ① 国宝 四天王寺縁起〔後醍醐天皇宸翰本〕建武 2 年（1335）：南北朝時代
後醍醐天皇の息吹が伝わる直筆の書。
- ②重要文化財 舞楽面蘭陵王 鎌倉時代
天王寺舞楽を彩る舞楽面の名品
- ② 浪速名所図屏風 江戸時代
江戸時代の賑わいを今に伝える浪速の祭礼図

○中心伽藍

◆講堂

経典を講じたり法を説いたりする七堂伽藍の一つのお堂です。講堂内陣は中央を境に、東を冬堂、西を夏堂と呼びます。冬堂には現世の人々の悩みや、苦しみを救う十一面観世音菩薩、夏堂には来世極楽に人々を導く丈六阿彌陀如来をお祀りしています。つまり、現世と来世の二世に亘り、人々を安楽へ導き給うようにとの願いが講堂には込められています。

内壁には、郷倉千靱（1892～1975）画伯による仏教東漸が描かれています。

◆金堂

聖徳太子のご本地仏である救世観音をお祀りし、四方を四天王が守護しています。毎日 11 時より舎利出しの法儀が厳修されます。南無仏のお舎利を以て、ご先祖のお戒名（霊名）が書かれたお経木にあてられ、又参詣者の頭にあててもらおうと多くの信者さんが参詣されます。

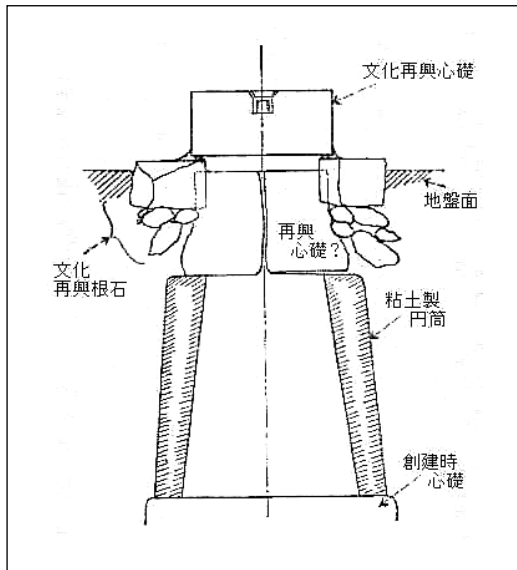
基壇下の青竜池より、白石玉出の清水が湧いており、この水を亀井堂に引いていると云われます。内壁には中村岳陵（1890～1969）画伯筆の仏伝図が描かれています。

◆五重塔

聖徳太子創建の時、六道利救の悲願を込めて、塔の礎石心柱の中に仏舎利六粒と自らの髻髪（きっぱつ）六毛を納められたので、この塔を「六道利救の塔」といいます。塔の入口は南北にあります。通常開放しているのは北側のみで、南正面に釈迦三尊の壁画と四天王の木像をお祀りしています。なお、この中心壁と外壁の各面に描かれた仏画は山下摩起（1890～1973）画伯の筆によるものです。

○摂津四天王寺創建心礎

昭和9年塔の倒壊時、塔跡の発掘調査が行われた。「四天王寺図録 伽藍編」にその様子が収録されている。下図は塔心基礎下方の構造です。



穴の下・地表約3.1mのところへ創建時のものと推定される心礎がある。土を洗い落とすと写真の9個の石があり、その石の間からは金環が出土したという、写真の曲尺（かねじゃく）は1尺。

◆中門

中門は中心伽藍の南端、南大門の北に位置し、脇の間に伽藍の守護神である金剛力士（仁王像）をまつていることから俗に仁王門と呼ばれています。東側（阿形像）が那羅延（ならえん）金剛力士、西側（吽形像）が密迹（みっしゃく）金剛力士で、大仏師松久朋琳（1901～1987）・宗琳（1926～1992）両師の作です

○西門石鳥居

扁額の文字は「釈迦如来 転法輪処 当極楽土 東門中心」と書いてあり、これは『おしゃかさんが説法を説く所であり、ここが極楽の東門の中心である』の意です。この額は箕の形をしており<チリトリ>のように全ての願いをすくいにとって漏らさない阿彌陀如来の本願を現しています。

もとは木造でありましたが鎌倉時代永仁2年(1294)に現在の石造となりました。寺に鳥居は奇異に感じますが、元来鳥居は聖地結界の四門として古来インドより建てられたもので神社に限ったものではありません。

四天王寺の山号は荒陵山（あらはかさん）といい、かつてここに大規模な古墳が

あり、四天王寺を造営する際それを壊したのではないかと思われます。かつて四天王寺の庭園の石橋には古墳の石棺が利用されていました。

長持形石棺蓋で宝物館の前に移設されています。

(完)